

埼玉県における麦食とその変化

「民俗資料緊急調査票」を資料として

Trends in Barley and Wheat Eating Habits and Observed Changes in
Saitama Prefecture : Questionnaires Used for the Emergency Survey on Folk
Materials in Japan and the Distribution of Eating Habits in Saitama Prefecture

戸邊優美

TOBE Yumi

はじめに

① 埼玉県民俗文化財分布調査と調査票

② 米と大麦一粒食の配合割合から

③ 麵食の優位と多様性

④ 高度経済成長期の食生活と麦

おわりに

【論文要旨】

本稿では、全国的に実施された民俗資料緊急調査の共通の調査票「民俗資料緊急調査票」を手掛かりとして、当時の日常的な麦食の実態を明らかにするとともに、高度経済成長期の食生活とその変化について検討する。埼玉県教育委員会は、昭和 52～53（1977～78）年度に「埼玉県民俗文化財分布調査」を実施し、調査地点 150 カ所の調査票を作成した。この調査票の記述に基づき、戦前まで全国的に主要な麦作地帯だった埼玉県の食生活について、粒食と麵食という主食の側から分析した。調査票が対象としている大正時代から昭和初期にかけて、粒食は米に大麦を混ぜて炊いた麦飯が一般的だったが、その配合は地域により異なり、台地上や山間部など水田耕作の不向きなところでは麦が優位となっていた。また、麵食は茹で上げるうどん系と煮込むオッキリコミ系に分けることができ、主に夕食として食べられ、日常的な麵食は県中央から県北、秩父地方で顕著だった。ただし、ハレの日の食事としては全国的に食べられていた。大麦・小麦の生産、製粉の効率、麵食の日常性等の違いによって、日々の麦食に地域性が生まれていたことが分かった。こうした麦に支えられた食生活は、大麦・小麦の生産量の減少とともに、高度経済成長期に姿を消す、あるいは食卓にあがる機会を減らしていった。その一方で、ハレの食事とされてきた麵食は、外食によって手軽に食べることができるようになり、地域性のある身近な食事として浸透していった。

【キーワード】 民俗資料緊急調査票、主食、麦食、粒食、麵食